

2024年度 活動報告

～ 健太と私たちの軌跡～



一般社団法人

健太
いのちの
教室

2024年4月24日
女川いのちの広場にて



夢に向かって一致団結
One for all, All for one.

活動への応援

賛助会員を募集しています。
わたしたちは、人の生命・身体の安全を第一に守る大切さを学び、各種安全対策に生かすための情報発信・研修等を行い、もったいのちを大切に作る社会づくりに寄与することを目的としております。
皆様のあたたかいご支援、ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。
活動を充実させるためにご寄付も受け付けています。

郵便振替先

[ゆうちょ銀行]
郵便振替 口座記号番号
02240-8-128300
加入者: 一般社団法人健太いのちの教室

銀行振込先

[七十七銀行]
本店営業部 店コード 100
口座番号 5087765

賛助会員年会費

個人 | 一口 | 3,000 円
団体 | 一口 | 10,000 円

編集・発行 一般社団法人 健太いのちの教室
住所 〒987-1304 宮城県大崎市松山千石字松山 220-1
発行日 2025年3月

Email tamuken@ark.ocn.ne.jp
Web https://kenta-inochiclass.com/

代表理事 田村 孝行 ・ 理事 田村 弘美



最新活動情報は
ウェブサイトにて確認
できます。

目次

代表挨拶	2
次年度活動指針	3
沿革 2024	4
まなびの広場 活動報告	5
労働災害事故遺族の思いとつながり / シンポジウム冊子 企業防災・企業のあり方 / 御巢鷹山慰霊登山	6-7
絵本『ふしぎな光のしずく～けんたとの約束～』	8-9
世話人挨拶 市川 正子 / 加山 圭子 / 美谷島 邦子 / 活動を支える世話人の方々	10-11
活動記録 / メディア出演情報 / 静岡銀行の取り組み	12-28
活動に寄せられた感想	29,30-31
健太いのちの農園 秋の里山感謝祭 2024	32





次年度活動指針

代表あいさつ

はじめに、一般社団法人「健太いのちの教室」は、お陰様で2024年度5期目を終えることが出来ました。これも、ひとえにご支援を賜ります世話人様はじめ賛助会員の皆様、また繋がりを頂きました皆様のお力添えが有ってこそ出来たことでございます。深く感謝申し上げます。

私たちは、震災以降、女川の復興の様子を見ながら、あの時の風景が消え、あの時の記憶がどんどん薄らぐ中で、息子の最期の場に立ち、ここで何があったのかを語り伝えてきました。震災からあぶりだされた課題、その教訓を一緒に考えて頂き、次の世代に繋ぎ、命が守られる社会へとその一助になれるように、活動を続けて参りました。

そして、設立から5期目のスタートは、2024年3月に、絵本『ふしぎな光のしずくけんたとの約束』を出版し、全国の学校、教育委員会などへ寄贈を致しました。絵本を通して永く語り継がれることを願っています。学校関係・企業・団体の方々などへ、今期もその学びを伝え、意見交換をさせて頂きました。そして絵本から命の大切さを小中高生や大学生に、より広く多く新たな形で伝えることが出来ました。

4年前より実施をしている健太いのちの教室「まなびの広場」2024年度の一回目は8月12日、報道関係に進みたい大学生の皆様と、日航機墜落現場である群馬県上野村御巢鷹山へ慰霊登山を行いました。実際に現地に行き、自分自身の五感を使って見聞きしてもらいました。学生の皆さんには、これから様々な事案にしっかりと向き合

伝えていかねばならないと心に刻んで頂きました。また、震災当時を振り返り、現地女川を歩きながら、同時ライブ配信も行いました。共に学び共有することが出来ました。「健太いのちの教室」では、講演、現地語り、オンラインなどを含めて2024年度は、年間計約2000名の方々に聞いて頂いています。そして、健太いのちの教室が主催となり、労災遺族との緩やかな連携でフォーラム「労働災害事故遺族の思いとつながり」も開催することが出来ました。多くの方々からの支援とご尽力に心から感謝申し上げます。

2025年度も昨年度と同様に、講話・ワークショップを企業の方・大学生・子どもたちと各階層で実施し、まなびの広場の実施では、事故・災害の現場に参加者と行き、事案からの学びを得るプログラム、ゲストスピーカーをお呼びしてテーマを設定し、共に学ぶプログラムを準備します。「企業防災・組織防災」「企業のある方」の更なる浸透を目指し、今私たちが出来ることを一つ一つ丁寧に活動して参ります。

震災より14年、時間には限りがあります。様々な方法で「伝える」から「伝わる」ように語り続けます。そして私たちの教訓を次世代へ「遺す」ことも重視して、微力ではありますが、活動していきたいと思っています。

世話人様はじめ賛助会員の皆様、また繋がりを頂きました皆様には、これからもご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。併せて皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

活動目標1

「命を守る企業防災・組織防災」 「企業のあり方」の更なる浸透

二度と同じ悲劇を企業・組織で繰り返すことのないように、有事から従業員の身体生命をどう守るのかについて、BCPなどの災害対応の計画の中に位置づけることを浸透させるために「いのちを守る企業防災」(3・11の教訓を踏まえた企業防災プログラム冊子)を活用。企業・組織に向けたアプローチを展開、講話及びワークショップなどの実施機会の拡大を図ります。災害や事故で犠牲になられた方々へ慰霊訪問をし、御霊の平穏と社会の安全を祈ります。震災15年目も対面・オンライン共に、企業の防災と命の大切さの講話に努めて自分事として捉えてもらい、命を守る行動に繋がってもらいます。女川現地語り・オンライン講話を随時受け付けています。

活動目標2

「健太いのちの農園」活動で命の恵みに感謝を

命が育まれる「健太いのちの農園」では、今年も収穫の喜びを通じて、自然の恵みに感謝し命の大切さを学び伝えます。コミュニティの一環として参加者を募り、里山収穫祭、野菜の収穫体験を行います。収穫した野菜は繋がりを頂いた子ども食堂・被災地などへお届けします。花や野菜、虫たちが元気をくれていきます。自然豊かな山里で、私たちと一緒に穏やかな一日を過ごしてみませんか。収穫体験と見学、園内コミュニティスペースにある震災パネル見学を随時受け付けています。



2024年度 沿革 主な活動

- 4 伝承活動 計113名
(兵庫県加古川市 JPはりま東支部、東北放送 新人研修、兵庫県西宮市講話ほか)
東池袋自動車事故 慰霊
JR 福知山線事故 慰霊
女川町役場 町長面談(絵本寄贈) など
- 5 伝承活動および講話 計239名
(日本リーテック安全大会講話、東北大学語り継ぎ授業ほか)
女川いのちの広場 伝承活動・ミニコンサート
加美町役場 町長面談(絵本寄贈)
オンライン伝承活動・情報交換(名古屋至学館大学ほか) など
- 6 伝承活動および講話 計73名
(みやぎ東日本大震災津波伝承館、和歌山県、古川高校キャリアセミナー講師、東北大学語り継ぎ授業ほか)
シンドラーエレベータ事故 慰霊・集会 など
- 7 伝承活動および講話 計345名
(専修大学特別講義、東北大学語り継ぎ授業ほか)
みやぎ東日本大震災津波伝承館 絵本セッション登壇
仙台 拉致被害者支援会 参加
石巻 MEET 門脇 絵本朗読会
- 8 伝承活動および講話・ワークショップ 計95名
(雄勝花物語 千葉県八千代高校野球部講話、吉野作造記念館 平和のつどい講話ほか)
群馬県御巣鷹山 日航機墜落事故 慰霊登山
第10回「まなびの広場」開催
- 9 伝承活動および講話 計135名
(新潟県 株式会社村尾技建講話、JR 西日本、福岡大学講話、とちぎ連合会講話、大東文化大学講話ほか)
新潟県 山古志村他 視察
- 10 伝承活動および講話 計77名
(東京都桜堤中学校講話ほか)
閑上の記憶 絵本朗読会
東京 産業殉職者合祀慰霊式 参列
第11回「まなびの広場」開催
- 11 伝承活動および講話 計50名
(JP 近畿労組講話、東京都大田区ほか)
健太いのちの農園 里山感謝祭
- 12 伝承活動および講話 計203名
(福岡県、新潟県上越市小学校講話ほか)
みやぎ東日本大震災津波伝承館 シンポジウム 登壇
仙台都会館 3.11 メモリ交流会
JR 福知山線事故 遺族・JR 西日本労組 懇談会 参加
- 1 オンライン伝承活動・情報交換 計65名
(日本赤十字社講話ほか)
阪神淡路大震災 慰霊
第12回「まなびの広場」開催(オンライン)
- 2 伝承活動および講話 計365名
(静岡銀行講話、敬愛大学講話、日本赤十字オンライン講話、中新田中学校「いのちの教室」講話、大崎法人会講話ほか)
東京 専修大学 フォーラム「いのちを大切に安全な社会づくりをめざして2025」開催
- 3 伝承活動および講話 計240名
(みやぎ東日本大震災津波伝承館講話、大豆戸フットボールクラブ、日本赤十字宮城支部職員講話ほか)

健太いのちの教室主催「まなびの広場」



第10回 開催時 御巣鷹山にて

2021年度から健

太いのちの教室の活動の一環として、全国各地と東日本大震災の教訓を現場とオンラインで伝えるまなびの広場を開催しています。

ゲストとのクロストークと参加者とのディスカッションを実施し、未来のいのちを守るために何ができるのかを一緒に考えさせて頂いています。

2024.08.12

美谷島邦子さん

第十回 ゲスト

テーマを「8・12日航機墜落事故 御巣鷹山慰霊から学ぶ」として、2024年8月12日群馬県上野村日航機墜落事故慰霊登山を参加者と一緒に行いました。

ゲストスピーカーの日航機墜落遺族8・12連絡会 美谷島邦子さんから当時の事故の状況と安全への想い、慰霊登山の意味などをお話して頂きました。参加者と事故・災害の伝承と、安全啓発への取り組み方などディスカッションしました。



2024.10.20

高松康雄さん

第十一回 ゲスト

テーマを「2011年3月11日、女川では何が起こったのか」として、何が命の分岐点となったのか、参加者のみなさんから意見を頂き、考える時間とさせて頂きました。

実際に女川の街を歩き、津波の痕跡をたどり、被災当時の状況を今の風景に重ね合わせて説明させて頂きました。後半は、ゲストスピーカーの女川町在住 高松康雄さん(奥様が津波で犠牲となり、現在も行方不明。潜水士の資格を取り、行方不明者の捜索活動を続ける)より、捜索への想いと現状の女川湾の様子などお話しして頂きました。



2025.01.26

霜崎大知さん
遠山良徳さん
岡本珠梨さん

第十二回 ゲスト

テーマを「遺族と繋がりがかりから明日へ、未来へ」として開催しました。これまで多くの方々との出逢い、事例からの学びを伝えてきました。

出逢った方の中から、新潟県上越市 南本町小学校教諭 霜崎大知さん、福岡県大牟田市 金泉寺住職 遠山良徳さん、創価大学4年 岡本珠梨さんから、事象と学びをそれぞれどう感じ取られ、伝えていくのかお話しして頂きました。

後半は、参加者の方々と意見交換をさせて頂きました。この学びを身の周りの方々へ伝えていくこと、思いを共有することが必要とご意見を頂きました。



ホームページ掲載情報 YouTube動画掲載



第11回 まなびの広場 2024年10月20日 開催
「3.11 あの時、女川で何があったのか」
前半は、七十七銀行津波事故(労働事故)の概要と事故からの学びを現地よりライブ配信。後半は、3.11 あの時証言として、女川町在住の高松康雄さんから、捜索への想いをお話頂き、絵本「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束」の朗読などを行いました。
<https://youtu.be/QVZ3hqTgFOc>



BGM付き 2024年4月4日 開催
「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束」
女川で出逢ったミュージシャンの方々とチーム健太プロジェクトを立ち上げ、約5年の歳月をかけて制作した一冊の絵本。健太との思い出と、3.11 あの時からの田村夫妻の想いや活動を描いた内容をBGM付きの朗読形式で紹介しています。
<https://youtu.be/aQ1yZshbrAs>



労働災害事故遺族の思いとつながり

—いのちを大切に— 安全な社会づくりをめざして2025—

2025年2月8日東京・専修大学神田キャンパスにて、フォーラム「いのちを大切に」安全な社会づくりをめざして2025」を実施しました。

労働災害事故をテーマに、ご遺族に、それぞれの事故と亡きご子息への思いを語っていただき、その思いをせめてもの教訓とするために、関係者と有識者をお招きし、労働災害事故の再発防止に向けた方策を話し合いました。

第一部 ご遺族の報告 事故と亡き子への思い

- 田村孝行・弘美 (七十七銀行女川支店津波事故遺族)
- 高橋幸美さん (電通過労死遺族)
- 佐戸恵美子さん (NHK過労死遺族)

第二部 パネルディスカッション 思いをせめて教訓とするために

- 【パネリスト】
田村孝行・弘美
高橋幸美さん
佐戸恵美子さん
下村健一さん
故・佐戸未和さんを生前に指導
清山玲さん
【茨城大学教授、過労死防止学会副代表、専門分野：人事労務管理】
【コーディネーター】
飯考行さん
(専修大学法学部教授)



▲フォーラム開催の様子
■2025年2月8日 専修大学神田キャンパス

企業・組織への講話 企業防災・企業のあるり方

2024年度活動において、当会が命題としている企業・組織への働く者の命を一番に考える「企業防災・企業のあるり方」の講話を、これまで以上に実施させて頂きました。

企業・団体として、日本リーテック様・株式会社村尾技建様・日本郵政近畿労働組合様・日本労働組合総連合会栃木支部様・大崎法人会様・日本赤十字社宮城支部様・JR福知山線事故遺族会様・ふるかわ平和の集い様・その他、多くの企業様・団体様へ講話をさせて頂き、多くの方々の感想や意見交換をさせて頂きました。その中で共通しているのは、遺族の方の経験からの学びを聞くことにより、自分事として日常に起こりえる労働災害があるのだという気づき。また、企業・組織のあらゆるリスクを考え、リスクに対する最大限の人命を守る。そしてあらゆる知恵を出し、事前対策を備え、実践できる体制を整える必要があります。組織の中に同調圧力など感じさせない組織風土が企業・組織には必要であるという考えを考えていただける機会となりました。

●講話に参加しての感想

一般社団法人 健太いのちの教室 田村様
先日は、貴重なお話をいただきまして、誠にありがとうございました。組織防災、労働災害防止などの視点からも、学びや気づきをあらためて得ることが出来ました。

安全対策に終わりはなく、常に改善が必要で、そのためにも、風通しの良い組織、職場を築くことが、重要といったお話は、労働組合の活動にも大きく関わることに感じました、田村様の今後のご活躍を心より祈念申し上げます。

連合栃木



▲防災セミナー開催の様子
=2024年9月21日
日本労働組合総連合会栃木県連合会

まなびの広場 御巣鷹山 慰霊登山

メディア志望の学生や若手記者のみならず、日航ジャンボ機の事故現場、御巣鷹山へ一緒に慰霊登山をしました。事故から今年で40年です。今では、日航のご遺族以外の方々も多く登られて、命を学ぶ場になっています。

現場に立ち、当時の状況を知り、思いを共有しました。

若い世代の方々にも多く参加して頂いています、事実を語り継ぎ、これからの社会に生かして欲しいと思っています。

全国から様々な職種の方々にも参加して頂き、学びの輪が広がっています。

※登山に参加した学生さんの感想は、P31をご参照ください。



▲第10回 まなびの広場 開催時の様子
=2024年8月12日 御巣鷹の尾根

いのちを大切に 安全な社会づくりを めざして

— 一般社団法人
健太いのちの教室設立記念

東日本大震災、その経験は私たちの人生観を大きく変えました。健太の葬儀の時の会葬御礼に込めた親としての約束。「健太を生かし続ける、健太のいのちを役立たせる」と誓いました。その誓いが私たちの命題となり、1人の親として何が出来るのか、模索してきた13年でした。

いのちの大切さや安全な社会に向けてどうあるべきか、私たちは健太から多くのことを学びました。この学びを次世代へ生かし続けるため、渡された命のバトン・精神のバトンをしっかり渡せるように、多くの方々からご助言と勇気を頂き、2019年11月に一般社団法人「健太いのちの教室」を設立することが出来ました。

ありがたいことに、この法人を運営するにあたり、各分野の弁護士、大学教授、専門に防災を研究されている方など、そうそうたる方々に法人お世話人にあたって頂きました。そして貴重なご助言やこの問題を多くの方に提言する機会を頂いています。

お陰様で少しずつではありますが、命が守られる社会への浸透が進んで来ていることを実感することが出来ています。

お世話人はじめ、繋がりを頂いています皆様方には心から感謝の思いでいっぱいです。

その設立時に、私たちは女川まちなか交流館で「一般社団法人健太いのちの教室設立シンポジウム」を開催いたしました。

あの日の女川の事実とその背景、この活動への思い、そしてお世話人全ての方々への貴重なメッセージを発信することが出来ました。

その開催内容を全て文字起こしして、貴重な内容を記録に留めました。

次世代への継承の一つとして書籍化したいとの思いで、この度出版の運びとなりました。

消えゆく東日本大震災の記憶をもう一度呼び起こし、共に考える文献として目を通していただけたら幸いです。ご紹介します。



▲完成 / 発行日 2025年1月11日

絵本『ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束〜』

— チーム健太プロジェクトで5年の歳月をかけて完成した一冊の絵本



▲完成した絵本をモニュメントに捧げた=2024年4月24日 女川いのちの広場

● 絵本について

私達は女川の現場で、掛け替えのない命を守るにはどうすれば良いのかと震災の経験や伝え、多くの皆さんと共有し、考え続けてきました。

未来を生きる子どもたちに、「健太の命を繋げてあげたい」との思いから念願でありました絵本「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束〜」を2024年3月に出版することが出来ました。

息子の半生、あの日の事実、その後の親の想い、そして未来への希望と祈りが込められています。

この絵本から、何気ない穏やかな日常をおくれることの幸せと親の愛情、自分の命を守ることの大切さを感じて頂ければと思っています。

● 女川での出会いをきっかけに始まる絵本作り

私たちは、女川で横浜のミュージシャンの方々と出会いました。

その方々と、「チーム健太プロジェクト」を立上げ、約5年の歳月をかけて、一緒に絵本作りにあたって頂きました。

制作にあたり、息子の生い立ちや私たちが辿った現場など全てに立会ってもらい、100%私たちの思いを受け入れてくださり健太の生きた証を遺すことが出来ました。光のしずくに込めた想いが多くの皆さんに届きますように。

皆初めての取り組みで試行錯誤しましたが、完成に一塩の喜びを感じています。



▲絵本の原稿資料を手にして
2024年3月2日 宮城県大崎市自宅



▲チーム健太プロジェクトのみなさんと
2024年4月24日

絵本関連のイベントを開催

▲完成した絵本の読み聞かせを音楽とともに
2024年5月4日 女川いのちの広場



▲講話にて絵本を紹介する様子
2024年8月2日 雄勝花物語



▲震災の教訓を伝える絵本や紙芝居の読み聞かせを開催
2024年7月28日



▲夏休み特別企画として絵本の読み聞かせ会を開催
=2024年7月28日 MEET門脇

もっと多くの方々へ届けたい — 願いを託した400冊への想い

この絵本には、日々起きている戦争や様々な事故、そして度重なる大災害、もう誰にも辛い経験をしてほしくないという願いが込められています。少しでも多くの子どもたちに手にとって頂きたいという思いから、全国の教育機関や読み聞かせ団体等に寄贈させて頂きました。

● 主な寄贈先(順不同)

- ・ 岩手県大船渡市教育委員会
- ・ 宮城県女川町教育委員会
- ・ 大崎市教育委員会
- ・ 宮城県古川高等学校
- ・ 宮城県加美町教育委員会
- ・ 熊本県荒尾市教育委員会
- ・ 熊本県荒尾市内全小中学校、荒尾市立図書館
- ・ 福岡県大牟田市教育委員会



赤とんぼの会代表
エレベーター事故被害者遺族

市川 正子

エレベーターは、私たちの生活の身近にある乗り物機械です。しかしその構造や危険について何も知らず、ただ安全だと、厳しく管理されているのだと思っていま

せんか。私もあの日までそうでした。2006年6月3日、息子はいつものようにエレベーターを利用し、降り始めている最中に、突然エレベーターのかごが上昇したため、乗降口との間に挟まれ命を奪

はできないと、国土交通省・消費者庁・製造業者・独立保守業者に状況を改善して貰うよう、今も訴え続けています。今年で19年目をむかえるエレベーター事故、今も多くの方の寄り添いを頂きながら訴え続けています。その中で出会った田村さんご夫妻、災害・事故・事件等の遺族の方々には、規模の違い、状況の違い等、様々な違いはありますが、奪われた命をみんなの安全に活かす「一人一人の命を大切に社会を願って」という共通の願いを持っており、皆様との連携は、一遺族として歩き続けている私自身に勇気をくださっています。



紡ぎの会代表 東武伊勢崎線
竹の塚踏切事故遺族

加山 圭子

私の母は、2005年3月15日夕方、開かずの踏切で突然この世を去りました。踏切の遮断機を上げ下げする踏切保安係が、準急電車が来るのを忘れて遮断機を

あげてしまい、通行人が多数踏切内に入ってしまったために、4人が死傷するという事故に巻き込まれてしまったのです。電車は時速90キロメートルという速さ、圧倒的な重量。新聞記事によると、母は自転車から下りて自転車を押しながら踏切に入り、電車に撥ねられて20メートルほど飛ばされたとありました。即死でした。悲惨な事故を起こした保安係の責任を問う裁判や、鉄道会社が行った事故調査の事故報告書では、事故がなぜ起きたのか、事故にはどんな背景があるのか、十分明らかになることはできませんでした。私たちは、2005年当時、航空鉄道事故調査委員会に、竹ノ塚踏切事故の事故調査をすることを要請しましたが、死傷者5名以上という事故調査の要件に当てはまらないため事故調査されませんでした。竹ノ塚踏切事故のような悲惨な踏切事故を無くすには、事故の原因を明らかにする事故調査が必要であると訴えましたが、調査されませんでした。2008年運輸安全委員会が発足する際に、竹ノ塚踏切事故のような鉄道係員の操作ミスや車両や鉄道設備の故障などが原因で起きた死亡事故を新たに事故調査の対象にすることが決まりました。また、この事故の後、国土交通省は全国の踏切のうち緊急に対策が必要な踏切を抽出する作業を行い、1960箇所以上の踏切のリストを作成して様々な対策を講じています。



会を結成しました。遺族らと事故の現場をたずね、事故を無くすにはどうしたらよいか検討しました。運輸安全委員会には、踏切での死亡事故はすべて事故調査をしてほしいと要請してきました。その結果2014年から、遮断機のない踏切で起きた死亡事故について事故調査をすることが決まり、事故原因の究明がなされるようになりました。国土交通省は「鉄軌道輸送の安全に関する情報（鉄道局）」という統計を毎年公表しています。それによると、踏切事故の件数は長期的には減少傾向にあるものの、コロナ禍を経て、再び増加傾向にあります。2023年度は257件踏切事故がおきており、これは対前年度比62件増です。また、死傷者数は164人で対前年度比27人増となっています。国土交通省は、なぜ踏切事故が再び急激に増えて居るのか、その原因を調査し対策を講じるべきだと思います。一人一人を大切に、安心して安全に暮らせる社会にするためには事故を繰り返さないという強い意思が必要であり、鉄道はじめ関係者の皆様には、事故原因を究明し再発防止のための対策を講じてほしいと考えています。

一般社団法人
いのちを織る会 代表理事
8・12連絡会 日航ジャンボ機御巣鷹山墜落事故被害者家族の会 事務局長

美谷島 邦子

2015年8月に、日航機墜落事故現場の群馬県上野村の御巣鷹の尾根に震災で十七銀行の行員だった息子健太さんを亡くされた田村さんご夫妻と登りました。私の息子健の墓標に健太さんの野球ボールが供えられました。健太さんのお母様と一緒に吹いたシャボン玉は弾むようにして仲良く御巣鷹の空に消えていきました。「健太の命は、健ちゃんと同じように大切な命を守る役目を果たすと思います」と健太さんのお母様が話されました。

私はその後、宮城県女川町を訪ねました。女川支店跡地を望む高台に作られたモニメントは、スーツと制服を着た男女の行員が微笑む姿が刻まれていました。各地から訪れた人たちが手を合わせていました。そして「命を守るには高台に行かねばならぬ」と慰霊碑には書かれてありました。

健太さんご両親は「息子のためにできることは震災後からずっと考え続けています。企業で安全が最優先になって、いつか息子にあなたの死は無駄ではなかったと言いたいです」と絞るような声で話されました。私は、その思いを社会が受け止めていくことが健太さんたちの命を生かしていくことであり、亡くなった皆様に、残された私たちが唯一出来ることだと思えます。



なってしまうことで、失われていく尊い命。その現状を遺族は、「なぜ、命を救うことが出来なかったのか」「安全がすべての業務に優先していたのか」と必死に問いかけをしています。しかし、答えが曖昧のままになっていることも事実です。

被害者・遺族は、個人の罪を問いたいのではないのです。ましてや、補償等が目的ではありません。私たち日航機御巣鷹山事故の被害者もそうでしたが、事故の教訓を生かしてほしい。何を最優先しなければならぬかを企業は心に刻んでほしい。その願いは、災害でも事故でも同じです。

七十七銀行の遺族たちは、被災現場に立ち、語り部となり、悲しみの中で災害を伝えていきます。いのちを救うための教訓を共有して、次に起こり得る災害に備えるために全国から訪れる人に、必死に発信しています。求めるものは防災意識の向上です。安全は一人では作ることが出来ません。銀行は、企業として行員の命を守れなかった無念さを遺族と共有し、多くの人々と共に祈る場を作って欲しい。そして、企業防災の向上について発信し、語り継いでいくことが、地域の人々の信頼を得ることにつながると思えます。

●活動を支える世話人の方々

- 順不同、敬称略
- 一般社団法人 大船渡津波伝承館館長 齊藤賢治
- ノンフィクション作家・評論家 柳田邦男
- 一般社団法人いのちを織る会代表理事長 美谷島邦子
- 赤とんぼの会代表エレベーター事故遺族 市川正子
- 宮城教育大学 特任教授 3・11メモリアルネットワーク共同代表 武田真一
- 紡ぎの会代表東武伊勢崎線竹の塚踏切事故遺族 加山圭子
- 東京千代田法律事務所 弁護士 大城聡
- 専修大学 法学部 教授 博士(法学) 飯考行
- (株)まちづくり計画研究所 所長 防災・危機管理ジャーナリスト 渡辺実
- 特定非営利活動法人まち・コミュニケーション代表理事、博士(工学) 宮定章
- 和歌山信愛大学 准教授 高橋真
- 大阪市立大学 大学院 名誉教授 博士(法学) 高木亨
- 淑徳大学 地域創生学部 地域創生学科 教授 博士(地理学) 井出明
- 金沢大学 教授 博士(情報学) 室崎益輝
- 神戸大学 名誉教授 井若和久
- 徳島大学 人と地域共創センター 学術研究員 博士(工学) 永野海
- 中央法律事務所 弁護士・防災士 北見淑之
- 日本弁護士連合会 災害復興支援委員会 副委員長 佐藤靖祥
- 北見法律事務所(仙台) 弁護士 千葉達朗
- さとう法律事務所(仙台) 弁護士 小佐井良太
- 千葉達朗法律事務所(仙台) 弁護士
- 福岡大学 法文学部 教授 博士(法学)

2024年 3月17日
河北新報

2024年 4月8日
河北新報

慰霊碑は何のためにあるのか。11日、二つの碑を前にして考えさせられた。宮城県女川町の七十七銀行女川支店の駐車場に、木々で囲った一角がある。東日本大震災の津波で犠牲・担当者は「家族にはそれぞれ行方不明となった行員ら12人」の名前はない。「名前が家族が生きた証

宮城 二つの慰霊碑に思う

人を追悼する銀行側の慰霊碑だ。2018年に建立された碑には「あなたのこと、あの日のことを忘れない」とあるが、12人の名前が刻まれていない。地震発生時刻には約30人が黙とうした。失った一人一人の命の重

震災で長男亡くした大崎・田村さん夫妻

命の大切さ絵本に込め

東日本大震災の津波で長男の健太さん(当時25)を亡くした宮城県大崎市の父田村孝行さん(63)と母弘美さん(61)が、親子の思い出や子とを失った親の悲しみ、防災伝家の意義などを記した絵本を制作した。2人は「息子が生きた証を残す絵本ができた。かけがえのない命の大切さを伝えたい」と語る。

タイトルは「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束〜」。健太さんが生きた5年間で、悲しみから立ち上がる両親の歩みを伝える。前半は、やんちゃで大好きな野球をひたむきに続けた健太さんの成長の日々を、柔らかい筆致で描いた。後半は、両親が語り部活動を続ける中で、悲しみを乗り越えていく様子を丁寧に描いた。歳月を経て、2人は畑で野菜作りを始める。自然の恵みに癒やされ「健太はいつも見守ってくれていた」と気付く。

「健太の生きた証を残せた」



絵本を完成させた田村さん夫妻

とめプロデュース。音楽家が作らせた。弘美さんは「これから未来を生きる人の命を願う絵本を作りたい」と語り、孝行さんは「光のしずく」は空から見守る一人一人の命を最後先に考える社会を実現させる。諦めずに健太の約束を守り抜く」と決意を新たにした。(石巻総局・山老美桜)

息子が生きた証し、絵本に

14年目の被災地 東日本大震災

東日本大震災の津波で長男の田村健太さん(当時25)を亡くした父の孝行さん(63)と母の弘美さん(61)が絵本「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束〜」を刊行した。2人は「絵本を通じて命の大切さを伝えたい」と話している。

津波で犠牲 両親出版



絵本「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束〜」を完成させた田村孝行さん(左)と弘美さん夫妻。3月、宮城県松島町(大渡美咲撮影)

健太さんは平成23年3月11日の震災当時、七十七銀行女川支店(宮城県女川町)に勤務。支店内にいた行員らは支店長の指示で2階建ての屋上に避難したが、津波に襲われ、健太さんを含む4人が死亡し、現在も8人が行方不明となっている。

七銀行女川支店(宮城県女川町)に勤務。支店内にいた行員らは支店長の指示で2階建ての屋上に避難したが、津波に襲われ、健太さんを含む4人が死亡し、現在も8人が行方不明となっている。田村さん夫妻は、二度と同じ悲劇を繰り返さないために、震災の教訓や健太さんが生きた証しを将来に伝えていきたいと、支援者の協力を得ながら5年がかりで絵本を完成させた。

さん誕生や成長、就職するまでの幸せな日常が描かれるが、東日本大震災で一変する。後半には、健太さんを失った悲しみから前を向こうとする2人の姿が描かれている。地震の激しい揺れや、鳴り響く防災無線、巨大な黒い波が建物の屋上に避難した人たちののみこんでいく様子は、津波の恐ろしさが伝わるように描いたという。

弘美さんは「息子の生きた証を残すことができた。命の大切さを伝え続けたい」と話している。孝行さんは「命を守らなければ過去の記録が未来を照らすと思っていま

息子生きた証し 絵本に

東日本大震災の津波で宮城県女川町の七十七銀行女川支店の行員だった長男健太さん(当時25)を亡くした田村孝行さん(63)と妻弘美さん(61)が、健太さんの生きた証を残そうと絵本を自費出版した。震災から13年がたち、孝行さんは「息子と同世代の人たちはもう親になっている。子どもに読み聞かせてもらい、一緒に命の大切さを考えてほしい」と訴える。

遺族「命の大切さ考えて」

絵本は「ふしぎな光のしずく〜けんたとの約束〜」。悲しみと向き合ってきた夫妻の13年間の優しい色使いで描いた。幼少期、野球を始めた健太さんは孝行さんと「一度始めたことは続ける」と約束を交わした。震災で犠牲となり「大切な命を守ることを教えてくれた健太さんに対し、夫妻は、震災の経験を伝え続けると約束する。夫妻のそばには、健太さんが「しずく」となって見守っている、という内容だ。



制作には約5年間を費やした。弘美さんは「健太がここにいるね」とやっと思えた。息子は絵本の中で生き続ける」と話した。1冊1100円。宮城県内の書店や通販サイトなどで購入できる。

2024年 4月13日
産経新聞 東京本紙 朝刊

2024年 4月20日
沖縄タイムス



石巻市指定遺構大川小学校

シンポジウムを主催した団体の一つ、一般社団法人「大川の教育」の田村孝行さん(左)、松尾さん(右)と、大川は宮城県大川町の銀行に勤めていた妻子の松尾さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。



大川小学校の校舎を見つめる学生



シンポジウムで田村孝行さんを追悼する学生

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。



届け届けから集まった震災遺品。個人の上着と靴

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

命を失わせないために 伝承のバトンをつなぐ

河北 詩春



13年経った東日本大震災を伝える

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。



MEET門前での震災遺品展示(左)の説明を受ける学生

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

「大川の教育」の代表として、震災から13年経つ、大川小学校の校舎を見つめる学生。田村孝行さん(時25歳)を建設で亡くした。震災前は勤務先だった建設現場でも上司の指示がけつに追われ、厚の高校進級でもなかった。津波は行方不明となり、妻の命は失われたのだ。

2024年 5月3日
大崎タイムス



野球部の捕手として闘志を燃やしていた健太さんのようにガッツポーズする田村さん夫妻(中央)と野球部員。健太さんがつないだ縁だ

「健太の魂受け取って」

津波で長男亡くした 松山の田村さん夫妻 応援旗と絵本寄贈

東日本大震災の津波で長男健太さん(当時25歳)を亡くした大崎市松山の田村孝行さん(63)、弘美さん(61)夫妻は4月30日、健太さんの母校古川高に自作絵本「ふしぎな光のしずく」けんたとの約束」3冊と、野球部応援旗を寄贈した。

野球部で活躍 母校古川高へ

健太さんは震災当 震災を伝えることも 孝行さんは野球部員 時、七十七銀行女川支 健太さんが生きた だった健太さんのユニ 店に勤務。大津波警報 証しを残したいと、女 ホームや帽子、グラフ、 が発令される中、支店 川で出会った東京のミ 当時の写真などを紹介 長の指示で2階建ての ユーシヤンと約5 しながら「健太は背番 屋上に避難したが、行 年かけて制作。寄贈式 号『2』を誇りに思い、 員12人が犠牲になっ には牛来拓 校長はじ チームワークを大事に した。健太さんは半年後 め、野球部の茂泉公已 していた。葬式には野 に見つかったものの、 監督、千坂民美学校司 球部員が来て見送っ 現在も8人が行方不明 書、2、3年生の野球 くれた。今を大切に、 夢を持って生きてほし 絵本は、次の世代に らが出席した。 い。高校時代は今後の 孝行さん



らに温かく、熱を込め て語った。

孝行さんも1979 (昭和54)年卒の同校 部員たちは真剣なま OB。不撓不屈」一冊 なさして田村さん夫妻 雪魂」と書かれた応援 の話に耳を傾け、目を うるませる生徒もい た。田村さんの思いも ともに応援旗を受け取 った氏家主持は「本を 読ませてもらったが、 両親と健太さんの約束 『一度始めたら続ける こと。あきらめないこ と』という言葉が印象 に残っている。不撓不 屈の精神で苦しいとき もチーム全員で乗り越 えていく」と誓った。 千坂司書は「毎年5 月、2年生の被災地研 修の時期に合わせて震 災コーナーを開設して いる。震災を知らない 世代に本を通してうろ 伝えればいいのか考え ていた。今後も『命を 守ること』として展示 していきたい」と話し ていた。

2024年 5月10日
河北新報

震災遺族の田村さん夫妻(大崎市)

家族の歩み 防災絵本に



絵本を刊行した孝行さん(左)と弘美さん。女川町内の伝承拠 点にある遺構前に絵本を供えた

女川勤務の長男津波で失う 仲間と5年がかりで刊行

東日本大震災の津波で長男の田村健太さん(当時25)を亡くした父孝行さん(63)と大崎市と母弘美さん(61)夫妻が、家族3人の歩みを通して防災や命の大切さを伝える絵本を刊行した。震災の伝承活動で出会った仲間と5年がかりで作り上げた。「健太の生きた証しを残せた。かけがえない命の尊さを伝えたい」と周囲の教育機関などに寄贈している。タイトルは「ふしぎな光 太さんは地震に遭い、支店のしずく」けんたとの約束 長の指示で屋上に避難して」震災当時、七十七銀行 津波にのまれた。絵本は健太さん支店に勤務中だった健 太さんの生きた5年間と、 妻孝行さんに描き出す。 「次世代の子どもたちに 震災の記憶や教訓を伝えよ う」。約5年前、首都圏の 音楽家3人と制作に取りか かった。絵本作りは全員が 初めての経験。新型コロナ ウイルス禍も重なったが、 リモートなどで作業を続 け、今年3月の刊行にこぎ 着いた。 弘美さんと文章を考えた 木村真紀さん(62)横根市 には2013年、歌や音楽 を通じた復興支援活動で女 川町に立ち寄った際、支店 跡地で田村さん夫妻と出会 った。木村さんの紹介で夫 妻とつながった渡辺麻美さ ん(38)東京都は初めての 挿絵に挑戦した。渡辺さん は「これだけでもなく、ど の世代の人にも伝わる色便 いや構図を意識した。田村 さんたちの励ましがあって 描き上げることができた」と語る。 田村さん夫妻は伝承活動 を通じ、日版ジャンボ機鏝 落事故やシンドラー社エレ ベーター事故などの遺族ら と交流を深める。全国の 学校などへの寄贈は各地の 支援者の手によって展開さ れている。孝行さんは「企 業防災についても考えられ る内容になった。多くの人 に読んでほしい。健太の命 を生かしてほしい」と願う。 絵本はA5判カラー41 頁。1000部制作し、うち約400部を寄贈する。 県内の書店で販売してい る。1部1000円。

●メディア出演情報

- 2025年3月10日
NHK総合午後7時30分〜午後7時57分
NHKニュース・報道ドキュメンタリー
『クローズアップ現代』

【番組概要】(公式ウェブサイトより)
『どうする? 仕事中的災害』
遺族の声から考える企業防災

【番組概要】(公式ウェブサイトより)
『東日本大震災から14年』
NHK朝の情報番組
『NHK NEWS おはよう日本』

2025年3月11日
NHK総合午前7時00分〜午前7時45分
NHK朝の情報番組
『NHK NEWS おはよう日本』
【番組概要】(公式ウェブサイトより)
『東日本大震災から14年』
女川いのちの広場に生放送出演。放送後、多くの反響を頂きました。

2024年 8月13日
河北新報

2024年 8月14日
河北新報

御巣鷹の尾根から 震災遺族交流の軌跡

520人がなくなった日影ヤンボ機墜落事故の発生から39年たった12日、群馬県上野村の現場「御巣鷹の尾根」で、書江大雄氏で77歳、行女川支店に勤めていた尾根の健太さん(61)と妻の弘美さん(63)が登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。



学生とともに登山した孝行さん(右から2人目)＝12日午前5時50分ごろ

安全な社会へ種をまく

健太さん(61)と弘美さん(63)夫妻は、事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。

御巣鷹の尾根から 震災遺族交流の軌跡

「今年も来たよ。そろそろ39年経つけど、現場の前で野ボールを投げたい。安全な社会を目指して、健ちゃん、健太の約言と誓いの言葉を記して。」

「命守りたい」決意一つ

健太さんが勤めていた上野村の現場「御巣鷹の尾根」で、書江大雄氏で77歳、行女川支店に勤めていた尾根の健太さん(61)と妻の弘美さん(63)が登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。夫妻は事故直後、弘美さんと弘美さんが登山をした。



邦子さん(左)や孝行さん(右から2人目)、弘美さん(同5人目)らが、御巣鷹の尾根で安全な社会実現への決意を新たにした＝12日午前11時15分ごろ、群馬県上野村

2024年 8月13日
河北新報



大学生連れ 教訓伝える

七十七銀女川支店遺族・田村さん

東日本大震災の津波で長男の田村健太さん(25)を失った孝行さん(63)と妻の弘美さん(61)が、12日、群馬県上野村の「御巣鷹の尾根」を訪れ、日影ヤンボ機墜落事故の犠牲者に祈りをささげた。安全な社会の実現に向けて教訓を伝えようと、当時を知らない大学生ら約10人を誘い、一緒に尾根を目指した。

登山に参加している。同行したのは報道現場で働くことを望む大学生や、防災教育に力を入れる小学校教員ら。孝行さんが語り部活動を通して知り合った若者たちに声をかけた。一行は、急斜面に犠牲者の墓標が並ぶ「スゲノ沢」や、墜落直前の機体が山肌を削

ん(30)は「与えられた命を精いっぱい豊かに生きる大切さを感じた。学びを新学期、子どもたちに伝えたい」と話した。

人命最優先の企業防災や組織の安全文化の確立は容易でない。孝行さんは「生きていく間に全ては変えられない。命と向き合う姿勢を現場で感じてほしい、若い世代にバトンを渡したい」と強調。弘美さんも「事故や災害を直接知らない世代も、遺族の話を通じて何かを感じてほしい」と願った。

(編集部・小関みゆ紀)



▲ 絵本を寄贈してくれた遠山住職と大牟田市教育委員会の皆さん
= 2024年8月30日 福岡県大牟田市教育委員会

災害から命守って 津波描いた絵本寄贈

東日本大震災で長男を亡くした田村孝行さん、弘美さん夫妻が制作した絵本「ふしぎな光のしずく」が、荒尾市内の全小中学校と市立図書館に計15冊贈られた。田村さん夫妻の長男、健

村さん夫妻から絵本を託された大牟田市の住職、遠山良徳さん(56)と荒尾市の自営業、弘島純子さん(64)が荒尾市教育委員会に届け

大さん(当時25)は震災発生時、宮城県女川町の七十七銀行女川支店に勤務。支店内にいた行員らは支店長の指示で2階建ての屋上に避難したが、津波にのまれて12人が犠牲になった。町内には他にも複数の金融機関があったが、高台に逃げて全員が無事。企業の下した判断が明暗を分けた。助かるはずの命が、なぜ失われたのか。二度と悲劇を繰り返さないため、「自分の命を守るの自分だけ」というメッセージを伝えるとともに、何気ない穏やかな日常を送れる幸せと親の愛情、命の大切さを感じてもらおうと、5年かけて絵本を制作し、今年3月に刊行した。

荒尾市教委にはボランティア仲間である弘島さんを通じて寄贈。日常の当たり前前の生活は、実は当たり前

動をしている遠山さんは8年ほど前から、田村さん夫妻と交流。預かった絵本を8月、大牟田市教委にも寄贈していた。

荒尾市教委にはボランティア仲間である弘島さんを通じて寄贈。日常の当たり前前の生活は、実は当たり前

浦部教育長に絵本を手渡す遠山さん(右)と弘島さん(中央)

ではない。子どもも大人も世代を問わず読んでいただければ」と遠山さんら。浦部教育長は「この本を通じて、子どもたちに命の大切さを伝えていければ。防災教育にも活用したい」と感謝を述べた。

(河野美緒)



▲ 絵本寄贈する準備の様子
= 2024年8月29日

2024年 10月24日
有明新報 大牟田荒尾版

2024年 9月13日
新潟建設新聞



▲ 上/第一部 講演の様子、下/第二部 消防訓練の様子
= 2024年9月4日 新潟市中央区 村尾技建

人命優先へ事前準備

新潟県建設コンサル 村尾技建は、全国各地で、大震災発生後、自分自身の命を守るために、何らかの事前準備が必要だと訴えている。村尾技建は、新潟市中央区に本社を置く建設コンサル会社で、建設現場の安全管理や防災対策に関する講演や研修を行っている。村尾技建は、建設現場の安全管理や防災対策に関する講演や研修を行っている。村尾技建は、建設現場の安全管理や防災対策に関する講演や研修を行っている。

社内新たなBCP周知

建設現場の安全管理や防災対策に関する講演や研修を行っている。村尾技建は、建設現場の安全管理や防災対策に関する講演や研修を行っている。村尾技建は、建設現場の安全管理や防災対策に関する講演や研修を行っている。

◆ 静岡銀行の取り組み

東日本大震災の教訓をもとに、今後予想される南海トラフ地震など有事に対してお客様・従業員・地域の皆様を守る為に、静岡銀行が名古屋銀行・山梨中央銀行に呼びかけ連携を結び、避難訓練など防災意識の向上強化する取り組みが行われています。

静岡銀行はその後、更に立地などを踏まえた支店ごとの災害リスクを考えた避難場所・避難方法を

災害用備蓄などの備えを 行員全員で検討し、有事に備える本気の取り組みが進んでいます。

津波リスクのある支店では、津波避難タワーや津波シェルターの設置

有事避難の際は、重要物の金庫への格納や、金庫・店舗の施錠は不要とマニュアル明記



▲ 津波避難ビル
= 静岡銀行 下島支店



▲ 津波避難ビル地域防災訓練(興津支店)
= 2023年 静岡銀行 興津支店



◀ 設置予定の津波避難シェルター

阪神大震災 30年

阪神大震災（1995年）で128人が亡くなった神戸市長田区の御蔵地区の被災者が、東日本大震災の遺族と交流を続けている。「私たちの思いに節目はない」。17日の追悼行事では二つの被災地の遺族が固く握手した。【井上元宏】

神戸・長田 東日本大震災遺族と追悼

御蔵北公園で久しぶりに再会し、握手を交わす田村弘美さん（左）と魚住哲也さん（神戸市長田区で）

つながりこれからも

17日午前5時46分、御蔵地区の御蔵北公園では、ろうそくがともされ、遺族や住民が黙とう。読経のあと、僧侶が震災犠牲者の名前を一人一人読み上げた。最後に読み上げられたのは、2011年の東日本大震災で津波に襲われた宮城県女川町の七十七銀行女川支店で勤務していた亡くなった田村健太さん（当時25歳）。母親の弘美さん（82）は同県大崎市へは目を閉じたまま聴き入った。

語り部活動を続け、24年に息子の生きた証しに絵本「ふしぎな光のしずくけんた」との約束を書いた。「災害に節目があるものではないと思うんです。思いは変わらなすすっと来ているので。私たちが夢中で14年を過ごしてきた。遺族にとってはそうなの。その思いを重ねよう」と、ここにきました。

10年前、「神戸から励ましをいたしたから」と初めて御蔵北公園の追悼行事に参加し、交流を続けてきた。公園近くに

ある認定NPO法人「まち・コミュニティケースション」の事務所には、田村さんも参加した東日本被災地からの寄せ書きも飾られている。

公園では、阪神大震災で母を亡くした魚住哲也さん（82）も黙とうをささげた。「助けられなかった悔しさ、悲しみ……」と話す少し言葉が途切れた。「新潟県中越、東日本、能登……。悲しかったやろな、苦しかったやろなと思ひ、手を合わせました」

空が白みはじめ、魚住さんは田村さんがいると知り、駆け寄った。以前、手作りの竹灯籠を贈っていたからだ。田村さんはパッと笑顔になり、「灯籠置いてますよ」と魚住さんの手を握った。

田村さんはこう話した。「阪神と東日本大震災。一緒に慰霊していた。つながり感謝しています」

2025年 1月19日
毎日新聞 神戸・阪神

3 2024年(令和6年)11月18日(月) ムーンス 毎日小学生新聞 (第3種郵便物認可)

つながり
いそいで高合にいそいで

命案には津波が来る平、突死の発音で飛び込む由利健太さんが描かれています。この絵子は、震災に命を奪った父たちが描いた絵が描かれています

命案を写した本村由希さん（右）と絵本を交わす由利健太さん（左）と突死の事件さん。甲斐は二命の行進道線で描いたモニメントです。一冊絵本を甲斐で2015年5月5日

oeye
写真で伝えるニュース
目の中の出来事も、カメラのレンズを通して見つめる「oeye」で伝えるニュース。毎週月曜（金曜日）の3部に掲載します。

宮古から戻った東日本大震災被災者の安川町。傾倒した橋脚の裏、百歩い路橋が千七銀行安川支店です。2011年3月14日、千七銀行一冊絵本

初めて命案の命を奪った由利健太さん。「命案を通して、新しい天に高の天切さを伝えていきたい」一冊絵本を甲斐市のM.E.E.十門橋で7月28日

大震災 語り継ぐ命

絵本の中へ息子に会いに

震災の体験を語る時、交流が生まれた本村由希さんら震災のミーティングがきっかけになりました。2011年、田村さんは震災の経験を語り継ぐために、お母さんの絵本を手に取りました。お母さんの絵本には、震災の経験が描かれています。お母さんの絵本には、震災の経験が描かれています。お母さんの絵本には、震災の経験が描かれています。

2024年 11月18日
毎日小学生新聞

2025年 2月9日
静岡新聞 朝刊

「働かせ過ぎ 追い込んだ」 都内 労災遺族 過労死防止訴え

労働災害事故で子どもを亡くした遺族が思いを語り合い、教訓を伝えるフォーラムが8日、東京都の専修大で開かれた。2013年に長時間労働で過労死したNHK記者佐和未和さん(当時31)の母恵美子さん(75)は「働かせ過ぎではなく『働かせ過ぎ』が未和を追いついた。どんな職場でも命より大切な仕事はない」と語った。

11年の東日本大震災の津波で宮城県女川町の七十七銀行女川支店の行員だった長男健太さん(当時25)を亡くした田村孝行さん(64)も登壇した。健太さんが上司の指示で高台ではなく支店屋上にとまり、津波にのまれたとして「事前

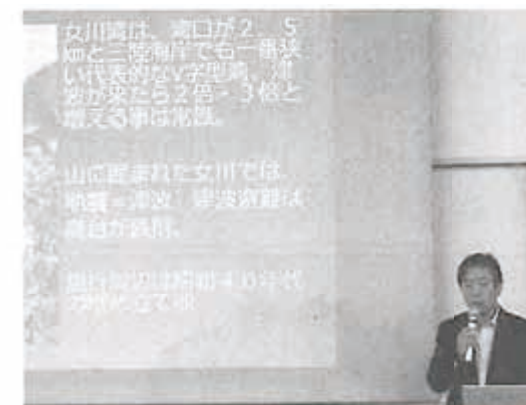
の訓練や人の命を第一に考える意識が必要だ」と企業防災の重要性を強調した。フォーラムは田村さんが立ち上げた一般社団法人「健太いのちの教室」などが主催。専修大は健太さんの母校で、オンラインも含め約120人が参加した。



▲ 労働災害遺族のみなさんと
=2024年10月23日 東京八王子市 高尾みころも霊堂

命より大切な仕事ない 宮城の田村さんら 労災死防止訴え

労働災害事故で子どもを亡くした遺族が思いを語り合い、教訓を伝えるフォーラムが8日、東京都の専修大で開かれた。2013年に長時間労働で過労死したNHK記者、佐和未和さん(当時31)の母恵美子さん(75)は「働かせ過ぎではなく『働かせ過ぎ』が未和を追いついた。どんな職場でも命より大切な仕事はない」と語った。



フォーラムで、東日本大震災当時の状況を話す長男を亡くした田村孝行さん(東京都千代田区)

でも命より大切な仕事はない」と語った。15年に長時間勤務やパワハラに苦しみ自殺した広告大手電通の新人社員、高橋まつりさん(当時24)の母幸美さん(62)は「過労死は人災」と指摘。「若

者の過労死はなくなっていない。職場改善や法改正で救える命だ」と再発防止を訴えた。

2025年 2月12日
毎日新聞 朝刊 宮城県版

息子の命輝く未来の光

津波に奪われた息子の命を未来に生かしたい。そう願いながら、両親はその後の人生を歩んできた。潮流が間近に迫っても、生きることを最後まで諦めなかった我が子。だから、自分たちも諦めずに体験を伝え続けていく。その胸には、かつて息子と交わした、ある約束がある。



やがて野球にのめり込む。クラブを持つ息子に向き合った父親は、こんな約束をする。

東日本大震災 14年

「ふしぎな光のしずく」けんたとの約束は、宮城県大崎市の田村孝行さん(64)と妻弘美さん(62)が、長男健太さん(当時25歳)と歩んだ日々を描いた絵本だ。東日本大震災後に出会った支援者の協力で、2024年春に完成した。

物語は「けんた」の誕生から始まる。母のおなかの中にいる時から元気いっしょに、木登りが大好きなやんちゃ坊主に育っていく。

交わした約束 伝え続ける



息子との歩みが記された絵本を手にする田村弘美さん(右)と夫孝行さん(宮城県松島町で2024年3月21日、百武信幸撮影)

地域に貢献できる、憧れの会社だったという。11年3月11日。入行3年目だった健太さんは沿岸部にある女川支店(同県女川町)に勤務していた。巨大地震と津波警報を受け、周囲では多くの人が近くの山へ避難する中、行

る。父は「けんたの約束」を語り、息子の命を未来に輝かせる光を伝える。この本が未来の命を輝かせる光とつながる。約束は、未来に響く。約束は、未来に響く。

2025年 3月6日
毎日新聞

2025年 3月8日
産経新聞 東京本紙 朝刊

命を守る思いは一緒

女川と御巢鷹つながる縁

14年前、息子は働いているさか
かに東日本大震災の津波にのまれ
てしまった。両親は二度と同じ痛
苦を出さないために企業と向き合
い、体験を
語り続けて
いる。その
中で、事故
や災害など
で子供や大
切な家族を
失った人たちとの交流が生まれ
た。願うのは「命を大切にす安
全な社会の実現」だ。
(大渡美咲)



群馬県上野村の御巢鷹山に美谷島邦子さん(右から2人目)と登る田村孝行さん(左)と弘美さん(左から2人目) 田村さん提供



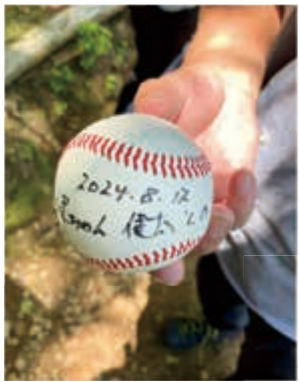
2月には労働災害をテーマにした講演会を開催。主役は田村孝行さん(左)と弘美さん(左から2人目)。田村孝行さん(左)と弘美さん(左から2人目)と田村さん提供

長男失った夫妻「企業と向き合い語り続ける」

「なせ七十七銀行女川支店だけが崖上へ逃げたのか」
救えたはずの命が失われた理由とは。何度も銀行に説明を求めたが、納得できる回答は得られなかった。
ある本との出会い
平成27年、2人はある本と出会った。
「御巢鷹山と生きる」日航機墜落事故遺族の25年。昭和60年の日航ジャンボ機墜落事故で当時9歳の息子を亡くした美谷島邦子さんが書いた本だ。遺族が日航とどう向き合い、日航がどう変わっていったのかが丁寧に書かれていた。
「大企業と向き合おう。子供の命をどう生かすかが書かれ、ものすごく刺さった」と孝行さん。
美谷島さんに手紙を書いたその年の8月12日、群馬県上野村にある御巢鷹山への御巢鷹山をともにした。「二度と大切な命が奪われてほしくない」という思いは一緒だった。遺族や被災者に向き合おうと思った」と弘美さんは振り返る。
脱線事故現場にも
それ以降、毎年、御巢



▲ 美谷島さんとともに
=2024年8月12日 群馬県上野村御巢鷹山にて



▲ 今年も健太が愛用した練習球を供える
=2024年8月12日 群馬県上野村御巢鷹山にて



▲ 灯籠を灯して川へ流す
=2024年8月12日 群馬県上野村御巢鷹山にて

交流も生まれた。
今年2月のフォーラムに登壇した家族との出会いもあった。長崎県労働やパワハラに苦しむ自らの命を絶つた広告大手電通の新人社員、高橋まつりさん(当時24)の母、幸美さんとNHK記者だった佐伯未和さん(当時31)を過労死で亡くした母の恵美子さんらだ。
思いを共有する中で、大切な命が失われた問題の根本には企業のあり方ではないかと考える。二度と同じ悲しみを生まないためにも、田村さん夫妻は訴え続ける。
「企業は一人一人の力で成り立っている。本気で従業員の命を守る人命第一の企業文化が根付いてほしい」

東日本大震災 14年

敬愛大生、東北被災者と重ねる交流 記憶のバトン次世代へ



敬愛大学の学生に震災当時の様子を伝える田村孝行さん(中央手前) 2月12日、宮城県女川町(敬愛大学提供)

千葉県市原市の敬愛大学の学生たちが、東日本大震災の被災地を訪ねて、被災者と交流するツアーを企画している。2011年1月14日、同大学の有志が宮城県で行ったツアーをきっかけに、年一回のペースで同県を中心に被災地を回る活動は、今年で14年目を迎える。ただ、震災時は幼く、震災の記憶があまりない大学生も増えた。活動は被災者の支援から、これから次世代への震災の記憶の伝承や、経験を語り継ぎたいための活動を伝えるものに移りつつある。



津波で亡くなった健太さんの写真を手に、命の大切さを伝える田村弘美さん(敬愛大提供)

若者「間接的な語り部」に 被害や教訓の伝承期待

「間接的な語り部をわれわれが担うべきだ」と田村孝行さん。被災地を訪ねるツアーの企画や実施を担う敬愛大学地域連携センター長(敬愛大)の田村孝行さん(敬愛大)は、被災地のインフラは復興が進み、現地に震災の記憶を伝える語り部は減っている。震災当時の記憶を継承し、被災者の苦しみや涙を伝える活動は、被災者や被災地を支援する上で欠かせない。田村孝行さんは、被災地を訪ねるツアーを通じて、被災者の苦しみや涙を伝える活動は、被災者や被災地を支援する上で欠かせない。田村孝行さんは、被災地を訪ねるツアーを通じて、被災者の苦しみや涙を伝える活動は、被災者や被災地を支援する上で欠かせない。



「上から指示が来ると、被災地を訪ねて被災者の苦しみや涙を伝える活動は、被災者や被災地を支援する上で欠かせない。田村孝行さんは、被災地を訪ねるツアーを通じて、被災者の苦しみや涙を伝える活動は、被災者や被災地を支援する上で欠かせない。田村孝行さんは、被災地を訪ねるツアーを通じて、被災者の苦しみや涙を伝える活動は、被災者や被災地を支援する上で欠かせない。」



▲ 集合写真、敬愛大学のみなさんとガッツポーズ
=2025年2月12日 女川いのちの広場



▲ 学生のみなさんと地域医療センター藤森センター長さんと
=2025年2月12日 女川いのちの広場

2025年 3月12日
河北新報

「元気にやっってるよ」海に花束 女川

東日本大震災の津波で12人が死亡・行方不明となった女川町の七七銀行女川支店の行員遺族らが11日、同町の女川湾に献花した。「早く帰ってきて」。穏やかな陽気に包まれた青空の下、遺族らは冷たい海の波間に漂う花束を見詰めた。支店で働いていた妻祐子さん(当時47)を捜す女川町の高松康雄さん(68)は、長女菅野莉奈さん(31)「利府町」と娘婿、孫の3人と花束を海に手向けた。

高松さんは「孫の姿を見せなかった。だっこしたかったらろう」と孫の航ちゃん(6)を見詰めた。菅野さんは「受け入れているようでいて現実味はない。元気にやっていると(母に)伝えたい」と話した。

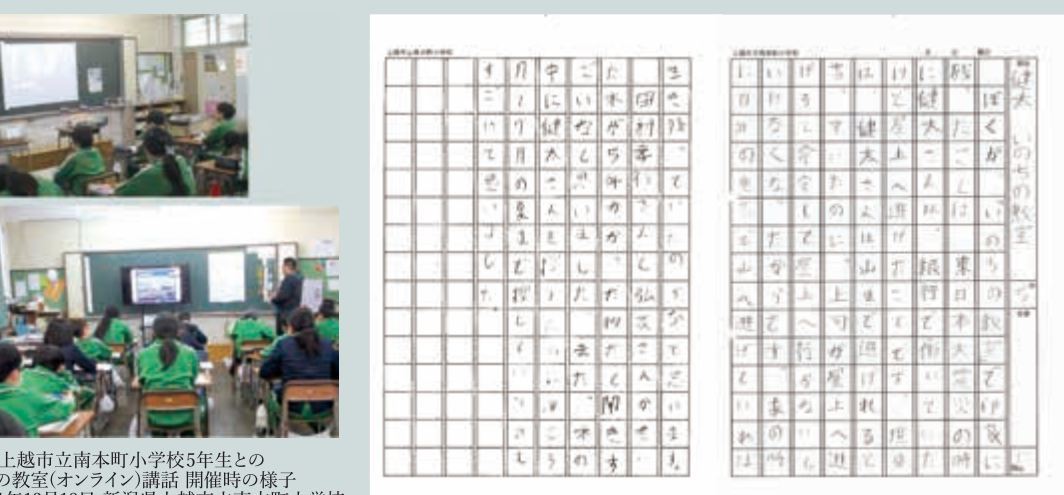
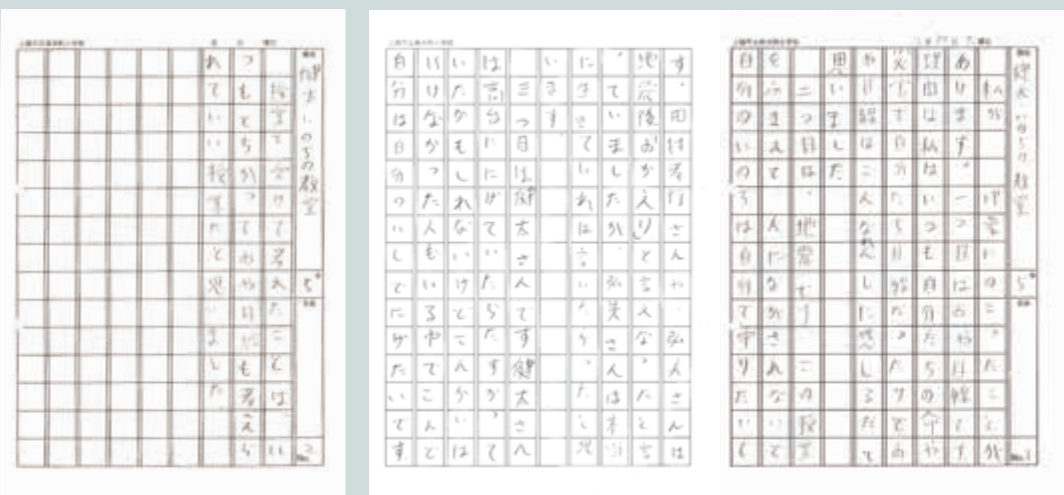
石巻市の成田博美さん(65)は毎日、行方が分からない長女絵美さん(当時26)にメールを送る。「いつか会おうね」「今日は何していた?」「ごめんね、ごめんね」。娘の存在を忘れないでほしい。悲しい限りだけど、自分が生きている限りは献花を続ける」と語った。

震災発生時刻には、慰霊碑前で約30人が黙とうをさした大崎市の田村弘美さん(62)は「逃げれば助かるはずだった息子たちを思うと、悔しさや悲しみは消えない。これからも多くの人命と防災の大切さを伝える」と力を込めた。



「帰ってきてね」と声をかけながら海に献花する七七銀行女川支店の遺族ら
11日午前11時50分ごろ

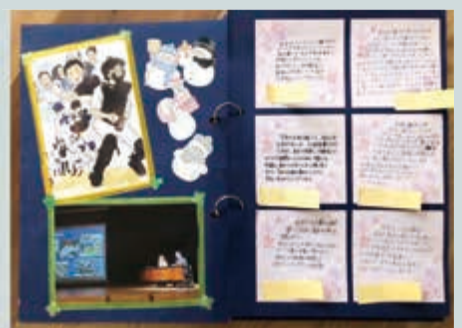
●活動に寄せられた感想



▲新潟県上越市立南本町小学校5年生とのいのちの教室(オンライン)講話 開催時の様子
=2024年12月18日 新潟県上越市立南本町小学校



▲「いのちの教室」講話開催の御礼ファイル表紙
=2025年2月21日 宮城県加美町 中新田中学校



▲「いのちの教室」講話開催の御礼としてファイルにまとめてくれた感想
=2025年2月21日 宮城県加美町 中新田中学校



▲「いのちの教室」講話開催時、感謝の舞を披露する生徒さん
=2025年2月21日 宮城県加美町 中新田中学校



▲震災から14年目を迎え、みんなでシャボン玉をとばす
=2025年3月11日 女川いのちの広場



▲毎年横浜から来てくれる星さんファミリー優しい歌声が海に響く
=2025年3月11日 女川いのちの広場



▲毎年、熊本県天草と福岡県大牟田から供養のために訪れてくれるご住職、心に沁みる説法に涙
=2025年3月11日 女川いのちの広場

2024年 12月13日
 東北大学 2024年度 全学教育科目
 国際教養PBL「東日本大震災の経験を未来につなぐ」特別講義
 受講生 最終レポート集（学部1年生）

「被災地・被災者のこれまでと私たちのこれから」

1. 授業受講の動機・目標

私がこの講義を受講した動機は、大学生になり仙台に住むことになり宮城県で起きた災害である東日本大震災についてくわしく知りたいと考えたからである。私は秋田県出身であり、秋田県でも大変な経験をした記憶が残っている。この講義を受けるにあたって秋田県ではない宮城県の当時の状況や、被災した方の心境について深く学びたいと考えていた。被災地に行かないと分からないことや、実際に話を聞くことでしか分からない気持ちなどを見たり、感じたりすることが出来る貴重な経験であり、ここでしか学ぶことができないことがあると思い受講を決めた。

2. 授業を通して「被災地（被災者）が経験してきた課題」として学んだこと

被災地（被災者）が経験してきた課題として学んだことと印象に残っているのは、震災で起きた事故が現代社会の問題にもつながっているということである。もちろん地震や津波での被害が大きかったことは知っていたが、田村さん夫妻のお話を聞き企業の管理体制の甘さによる事故があったことを知った。

これまで企業防災について考えたことがなかったが、これから社会に出ていく私たちにとって意識的に変えていかなければならないことなのだ。私は高校教員を目指しているが、校内での防災意識や備えについて注視し二度とこのようなことが起きないように努

3. 被災地（被災者）が経験したことが大切であると思った。また震災を他人事ではなく自分事として捉えることが、自分の命を守ることにつながることを学んだ。田村さんが「同じような経験をしてほしくない」とおっしゃっていたことから自分の大切な人たちにこの授業で学んだことを共有し、自分事にしていくことが重要であると考える。

この講義を受けるまでは被災地の「復興」は着々と進んでいるものだと考えていた。しかし、被災者と政府の考え「復興」は異なり意思疎通がうまくいっていないという現状があることも知った。今年一月に起きた能登半島での地震での支援についてもそうだが、被災地に寄り添うことの重要性を考え続けなければならないのだと思う。また対策の面でも被

4. 課題に対して自分ができること

害を減らすための方法をその地域だけでなく国としても周知させていくことで守れる命もあるだろう。

私自身ができることとしては、今回の授業で学んだことを身近な人たちに伝えていくことが挙げられる。災害時に自分の身を守るためには日ごろから自分の中でシミュレーションしておく必要がある。本授業で学んだ災害時での適切な行動や、東日本大震災での教訓を身近な人に伝えることでその人の命を守ることもつながるだろう。また一人暮らしをしている今だからこそ、防災のための備品をそろえていく必要があると思う。

5. 本授業における学びの中で自分の今後にかせること

私は将来高校の教員を目指す。私が教員になるころには震災を経験していない生徒をもつことが多くなるだろう。そうなったときにここで学んだことを生徒に伝え、生徒たちが次の世代へとつなげていけるような環境を作っていきたいと考えている。震災の記憶、そして教訓を伝え続け絶えさせないそれがこれから社会に出ていく私たち若い世代の役割だろう。

6. その他、授業全体を通しての感想

今回の授業はとても貴重な経験になったと考えている。語り部さんのお話を生で聞くと、震災のことがなかったため、震災のこと

を深く知ることができたことと、共に語り部さんと交流することができたのは全ての人ができるわけではない。また、そのお話を踏まえて発表をし、それを語り部さんに聞いてもらったというのはこの授業を受けたからこそできたことである。このような授業を計画してくれた先生方や発表に協力してくれた班のメンバーには感謝しありません。そして私たちに話をしてくださった語り部の田村さん、私たちの質問にも快く答えてくださり震災について大きな学びとなりました。ありがとうございました。ぜひこの授業を来年以降もつづけていただき、学生の皆さんには学びを深めてほしいと思う。



▲ 講話後、学生レポートを受けてディスカッションを行う様子
 =2024年6月24日 東北大学川内キャンパス



▲ 銀行の震災当時の被災状況とその学びについて説明する様子
 =2024年5月26日 女川いのちの広場



▲ 銀行慰霊碑の説明（遺族の望む慰霊碑について）
 =2024年5月26日 七十七銀行女川支店誓いの碑



▲ 女川町の被災状況（歩きながら海と山の距離感を知る）
 =2024年5月26日 女川市街

2024年 8月21日
 早稲田大学
 御巢鷹慰霊登山
 感想文（4年生）

まずは、今回貴重な機会をいただいたことに感謝申し上げます。日航機の事故については、中学生の頃からテレビの特集や本を読んで関心を寄せていました。当時中学生だった母は、何気なく眺めていたテレビ番組が突然臨時ニュースに切り替わったのを今でもよく覚えているそうです。当初は世界最大の航空機事故とはどのようなものだったのかという単純な好奇心からでしたが、『墜落遺体』や『風にそよぐ墓標』などを読むうちに、犠牲者やご遺族に思いを馳せるようになりまし。特に、乗客が最後に残したメモには心を打たれました。墜落するまでの約30分間、一体どんな思いで死を覚悟したのだろうか、その無念さを自分に置き換えて考えました。これほどまでに多くの命が潰えた尾根をいつかは自分の足で歩いてみたいと思っていたところ、7月に猪股さんからお声がけいただき、すぐさま参加希

望を出した次第です。

当日は、炎天下の中で救助にあたった関係者や記者の姿を想像しながら急峻な尾根を登りました。すれ違う方々の中には、杖をついて登るご高齢の遺族の姿も間々見られ、39年という年月の重みを感じずにはいられませんでした。肩に大型のビデオカメラを担ぎ、滝のような汗をかきながら一緒に登る報道陣の姿も印象的でした。私が今回の登山を通じて考えたのは、慰霊のあり方です。子供達がシャボン玉を飛ばし、歌声が響く中で故人の冥福を祈る。尾根での追悼式典は、私が予想していたよりも遙かに「賑やか」でした。もともと肅々と行われるものだと思っていたのです。それは、私がこれまで「慰霊」に対して何か後ろ向きなイメージを抱いていたからです。遺された人々が、共に深く悲しみや怒りに暮れる場だと勝手に思い込んでいました。

の尾根はそんな空間でした。慰霊とは前向きなものであると考えを改めました。ご遺族の姿を一括りに捉えてはいけないということも学びました。就活中に参加したインターンで、「ご遺族の中には社会に広く訴えたいと思う方もいれば、そっとしておいてほしいと思う方もいる」という話を聞いたことがあります。前者でいえば、長年先頭に立って遺族会を引っ張ってこられた美谷島さんの姿は印象的でした。広場で様々な家族と挨拶を交わしたり、近くにいた子供達には「おいで」とシャボン玉に誘ったりするなど、自然と輪の中心になっていました。一方、山小屋の近くでは、記者の取材をお断りするご夫婦の姿も見かけました。きつと、家族だけで静かに弔いたいという気持ちがあったのだと思います。すぐ傍にいた私としては、「関係者でも何でもない自分がこの場において邪魔になつてはいないだろうか？」と若干の申し訳なきを覚えました。弔いや悲しみへの向き合い方は人それぞれだと感じた出来事でした。

という言葉がよく使われますが、あくまでも部外者である記者には当事者の葛藤を100%理解することは難しいと思います。一学生の私が偉そうに言うことではないのですが、むしろご遺族の気持ちをわかりきったつもりでいたら、それこそ取材者側の驕りではないかとも感じました。しかし、だからといって一歩引くのではなく、相手の思いを自分に置き換えて考える努力を怠らないこと、そして、その思いを手垢のついた表現に頼りすぎずに言語化しようとする姿勢を持ち続けたいと思いました。自分が記者として躊躇なく悲しみの場に飛び込み、取材ができるかどうか不安は拭いきれません。しかし、今回現場を訪れたことで、それでも伝えなければならぬという覚悟は多少なりとも持てたように思います。以上、拙い文章ではありますが、2日間のスタディツアーで感じたことを出来る限り自分の言葉でまとめました。またこのような機会がありましたら是非参加させていただきます。ありがとうございます。

〔記録〕2024年 11月18日
健太のちの農園 秋の里山感謝祭2024

晴天に恵まれた里山の畑で、太く成長した大根を汗だくになって引き抜きました。
自然の恵み、野菜の収穫に子どもたちも大喜び！
そして、皆で干し柿作りも体験。皆さん初挑戦でしたが頑張りました！(^^)
実りへ感謝して、お昼には、新米おにぎりや収穫した野菜を入れた豚汁、カレーなどが振る舞われました。お腹いっぱい食べてみんな笑顔！穏やかな一日となりました。
収穫した大根や、皮をむいた柿は持ち帰っていただき、美味しく食べてもらいました。

